

Y3-14

東日本大震災 初動救護班を経験して ～主事の観点から～

神戸赤十字病院 検査部¹⁾、

日本赤十字社兵庫支部²⁾

安部 史生¹⁾、戸田 一潔¹⁾、葛嶋 元子¹⁾、

菊川 佳代¹⁾、横山 杏花¹⁾、久貝 美和¹⁾、

山岸 雄幸¹⁾、岡田 浩明¹⁾、高本 浩路¹⁾、

沖野 恵司¹⁾、上江 孝典¹⁾、浅田 恒生²⁾、

北村 幸司²⁾

2011年3月11日14時46分、三陸沖を震源とした震度7(M9.0)の地震・津波が発生した。災害救護の為、兵庫第一班として神戸赤十字病院初動救護班は医師1名、看護師4名、薬剤師1名、主事5名、支部2名の計13名、ERU2台、救急車1台、救護車1台の計4台で18:35に出動、発災24時間後の翌12日15時に盛岡赤十字病院に到着した。翌13日静岡赤十字病院、浜松赤十字病院両救護班、静岡県支部と共に総勢33名、車両8台で釜石市へ移動、鈴子広場にERUを展開、診療を開始し、被災状況、避難所等の情報収集を行った。大槌町では町役場が流されるなど悲惨な状況であることを避難者から得、救護班1個班巡回の検討を行うとともに、岩手県支部から大槌町の状況を県災対本部等へ送って頂いた。また花巻空港SCUのDMATに大槌町へのDMAT隊派遣について打診を試みたが常時通話中で断念に至り、浜松赤十字病院救護班が大槌町へ向かう事となった。釜石市内の14日時点で知り得た避難所は63カ所11000人強であった。15日後続班に業務を引き継ぎ無事帰院に至った。今回の災害活動を経て、赤十字は非常に大きな組織で、急性期から慢性期復興期まで継続して救護活動が行える優れた団体組織である事、連携・統制や情報の共有に支部の存在が非常に大きいと感じた。しかし一方で、今回の様に非常に大きく広範囲である災害の超急性期においては現時点での赤十字の救護班だけでは医療の資源特にマンパワーにおいては到底追いつかない状況であったと感じた。今回の活動経験を振り返り、赤十字の超急性期の救護活動(医療資源、情報の発信や共有等)やDMAT等との協働について考察を踏まえて報告する。

Y3-15

災害救護初動時の指揮命令系統

名古屋第一赤十字病院 救命救急センター¹⁾、

長岡赤十字病院²⁾、

愛知県支部³⁾

花木 芳洋¹⁾、江部 克也²⁾、菊池 隼人³⁾

遠隔地への救護班派遣時の指揮には課題が大きいとされている。今回の東日本大震災時の経験を報告する。名古屋第一赤十字病院救護班(以下「名一救」とする)は、愛知県支部の指示により出発し、途中、福島県支部に行くよう指示があった。福島県支部より福島県新地町で先着の長岡赤十字病院救護班(以下「長岡救」とする)と活動するようにとの指示があった。到着後、福島県支部より、新地町より撤退し隣の宮城県白石市に行くよう指示があった(福島県支部と宮城県支部間に連絡調整無し)。「長岡救」が新地町災害対策本部に説明し、撤退の了解を得、両救護班は各々の支部の了解下、白石市に出発した。「名一救」が白石市災害対策本部と協議をし、13日早朝より活動を開始した。白石市での医療救護の需要は大きくないと判断し、先遣隊を宮城県支部に派遣し、白石市での活動を報告した。宮城県支部より石巻への変更の要請を受け、愛知県支部との調整後、白石市災害対策本部に事情を説明し、撤退し、新たな目的地である石巻市へ出発した。「長岡救」は発災当初、DMATとして出動した。DMAT活動を終了後、救護班としての活動となった。新潟県支部は福島県支部と協議の上、福島県新地町での活動を指示し、新地町役場に行った。「長岡救」は白石市の活動終了後、宮城県支部に白石市での活動を報告し、新潟県支部の指示により長岡へ帰ることになった。最初から救護班として出動する場合でも、最初はDMATとして出動する場合でも、災害現場の支部が混乱に陥っていて確実な情報が無い状況下でも、所属する県支部と緊密に連絡(衛星携帯電話等)を行い、さらには現地での災害対策本部と調整することにより、指揮命令系統の混乱はなく、活動できたと考えられる。